

一步前に踏み出す勇気

文学部行動文化学科社会学専修課程 4年 2006年留学

イリノイ大学での留学生活で自分は一体何を成ることが出来たのだろうか、帰国から3年近くたった今でもよく振り返ります。六本木のバーで、特に予定のないクリスマスの夜と一緒に過ごしてくれる留学仲間か。あるいは、私がシャンペーンを尋ねた時はどんなに忙しくても集まってくれるイリノイの友人達か。はたまた、院進学をすんなりと決断させてしまうほどだった、学問の奥深さと面白さか。どれも甲乙付けがたいぐらいに本当に大切なものですが、あえて一つを挙げるとするならば、それは「一步前に踏み出す勇気」だと思います。

友人達はあまり信じてくれないかもしれませんが(笑)、私は、小学生の頃には親戚から自閉症を心配されるぐらいにシャイな子どもでした。その反面マセたところがあったので、新聞の政治経済面を毎日読んでは、日本の先行きを子どもなりに憂っていました。しかし、憂いているだけで、何かしらの行動に出るということはありませんでした。年を経るごとにその性格は改善されていったとはいえ、大学で第一希望ではない学部に入ってしまったことによる後悔もあって、前向きな生き方をすることがなかなか出来ませんでした。相変わらず世の中に対する不満や疑問は溜まっていたのですが、自分に出来ることなんてたかがしれていると思い、20代にして厭世的な気分になっていました。

そうこうしているうちに大学3年の就職活動の時期を迎え、インターンの面接選考を受ける中、自分が大学生活で実は何もやってこなかったことに気がつきました。その時に初めて、「このまま、自分の殻に小さく閉じこもった人間でいいのか?」と、自分の生き方に対する強い疑問が湧きました。その頃学んでいた科学技術社会学の研究レベルにおいて、トップであるアメリカの大学で一度は学んでみたいと思っていたこと、2005年のJIC奨学生で、大学一年からの友人であったKさんやSさんが留学を強く勧めてくれたことも手伝って、土壇場で奨学生選考に応募し、運良く留学させていただくことになりました。

そのような経緯があったからこそ「寝ている時間以外は、一秒たりとも無駄にしない」との思いを持って臨んだ留学で、どのような経験をしてきたか。一つ確実に言えることは、ただひたすらに挑戦の日々であったということです。「半年後には、自分は完全に打ちのめされているのかもしれない...」という不安と共にシカゴ行きのJAL便に乗り込んで以降、その日々は始まりました。様々な個性を持ったルームメイトやフロアメイトとの関係の築き方に悩み、スピーチ課題では原稿を丸暗記するために何時間も暗唱を続け、期末レポートの作成過程では教官の指摘に対して激しく反論しながら原稿を何度も書き直し、たまの休みには朝から晩まで様々なアメリカの都市を駆け回ったかと思えば、友人に誘われれば極寒の夜でもPARからMurphy'sまで自転車を走らせる...そんな日々を送りました。一週間の平均睡眠時間が約3時間という日々もありましたが、自分のこれまでの人生で間違いなく最高の時間を過ごすことが出来たと今でも思います。

そして、それら挑戦の日々は、何か未知のこと・困難なことを目の前にした時に、恐れずに一

歩を踏みだしていく勇気を与えてくれ、私を「傍観者」から「行動者」へと確実に変化させてくれました。その変化が最初に表れたのは、イリノイ大学から帰国した後に、偶然出会った学生と意気投合したことをきっかけにして、日中韓の国際学生フォーラムを主催するための学生団体を立ち上げた時です。以降、その学生団体での活動や NPO でのインターンを初めとして、日本を少しでもよくすることに貢献したいとの思いを持って、挑戦の日々を続けています。時には留学時の生活よりもハードな日々を送ることもありますが、それでもなお踏ん張りきることが出来るのは、イリノイ大学での留學生活で得た「一歩踏み出す勇気」に支えられているからでしょう。この先の長い人生においても、これまでとは比較にもならないような苦しい日々があるでしょうが、イリノイ大学で過ごした日々があるからこそ、きっと乗り越えることが出来ると信じています。

最後になりましたが、私の人生を大きく変えるきっかけとなった JIC の奨学制度の創設者である小山八郎先生や、同制度の維持・発展に尽力されてきた JIC の諸先輩方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。そして私もまた、同制度が今後も多くの学生の人生の転機となっていくことを強く願って、JIC の活動に精力的に取り組んで参りたいと思います。